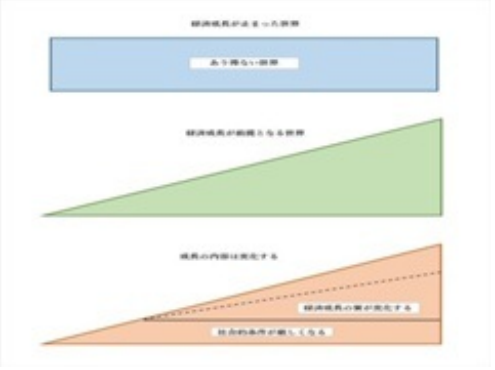
【2016-07-13】遊道楽歩（雑感）

書を友に、酒楽しみ、人生を味わう

長野修二

成長がない世界をイメージすると、なにが見える？

成長がなく、現状維持で固定化された世界を少々極端にイメージしてみましょう。



おそらく会社であればポストが固定化されており、定年退職者が現れてはじめてそのポストへ就ける人がでてくるということになるのでしょうか。
あるいは途中で退職者がでたとき、はじめて次の求職者にチャンスがくるということになるのでしょう。
経済成長が固定化された社会では、新たな人の採用は定年退職者+その他の退職者に応じた人数だけとなりそうです。
もっとも、実際には多くの要素を伴う変数になりますが、単純化して物事を考えることで普段と違う景色をみることが大切ではないか、と考えています。

現在、社会には閉塞感が漂っているようですが、少々極端な言い方をすれば、それは人が成長しない状況を感じとっているからでしょう。
企業の中でも例えば、普通であれば２年程度で異動になるポストが５年以上滞留していたりと、本人が考えていた以上に、特定ポストの滞留期間が長くなっていることもあります。
このような景色は、決算数字や経営内容がよい企業であっても増えてきているように思えます。
そのようなポストにいる人は釈然としないようですが。。。
ここのポストは、2年だったのではなかったの？、なんて言っているものです。
当然、ポストは前例にならって異動することが前提ですから、仕事の内容はなんとか理由をつけながら現状維持を手堅く守り通そうとします。
いわゆる問題は先送り、ミスをしないように前者の事例を踏襲しながら、なかにはそのようなポジションにふさわしくない仕事を積極的におこなったりと、外側の人間からみると滑稽な様相を呈しています。

非正規社員の場合、正規社員に転換されるチャンスも少なく将来展望がもてない生活があり、固定化された労働環境から将来の存亡（強い不安感）を感じ取っているのではないでしょうか。

このような仕事の中には、『笑み』が少ないのも特徴かもわかりません。

成長がむずかしい世界を単純化して考えてみるだけで人の思考や行動は大きく違ってくることがわかるようになるものです。
成長の身体感覚が身についていると、そこから考えることも成長をベースにした物語と将来像になってきますが、成長という身体感覚をもてない人が、そこから考えることは、成長がない物語と将来像になるのでしょうか。

経済成長がなぜ重要なのかは、一言でいえば、大勢の人間の存亡にかかわってくるからでしょう。
身近には、人の生活にかかわってくるという物語をもって将来を眺望するところから大きな変化（成長を感じない思考と行動）の兆しが生まれてきているのかもわかりません。
人は似たような環境にあれば、似たような眺望と物語を紡ぐようになるのでしょうか。

昨今の混迷は、人が自らの生活に関して捉えている身体感覚の発露ともいえるのではないでしょうか。
経済活動の長期低迷は、社会階層の固定化とともに、さらなる将来の眺望が自らの生活（人生）に直結することを身体が感じとり、強く自己防衛的な意識や行動になっているように感じられます。

人の生活をいかに安定させていくかということは、経済活動がグローバル化しているからこそ、これからいっそう政治や経済分野にかかわる実務家の最大の挑戦となるでしょう。
実務家の挑戦とは、人の生活を安定させるために適切な経済成長を図り、その実行にまい進するということにつきるでしょう。
どんなにすばらしい理論でも実行していく以外に『解』を得られることはありません。
実行者に対する批判は、どのような状況であっても続くものです。
実行者を批判するのではあれば、その実行者に代わって批判者が実行者となって自らの施策を実行すること以外に解決する方法はありません。
人も企業、さらに政治家も挑戦しない限り、いずれ企業に限らず人間の存在に大きなダメージを与えることは間違いないのではないでしょうか。

経済成長を固定化する、あるいはマイナス成長でも可能な社会を実現するなどということは所詮できないことであり、結果としてのマイナス成長はあっても進むべき方針としてのマイナス成長などはあり得ないことでです。

企業であれば、国内や海外で投資をおこない、それぞれの国において人材を増やすことで売上か、利益の増大を図り、労働者へ適正な賃金を支払っていくことが重要となりそうです。
さらに年金制度や労働法制などの抜本的な見直しと改革が必要となるでしょう。
また、まだ他国から学ぶべき要素がありそうですし、わが国独自の伝統や文化を活かした制度設計は可能なのではないでしょうか。

労働法制の改革は案外『肝』になるのかもわかりません。
いわば期間の定めのない雇用（いわゆる終身雇用）から期間の定めがある有期雇用へ転換することが求められますが、その理由は、社会全体の仕組みを変えていくことで、例えば、企業の経営者や労働者であった人が政治の分野へ進出することも可能となるでしょう。
今後の施策は、同一労働同一賃金も大事なテーマですが、幅広い労働移動が可能な社会を生み出すことで欧米とは一味違う仕組化ができるのではないでしょうか。
わが国の国民性からして階層的な仕組、非正規や正規社員といった区分は社会制度として受け入れられないものでしょうし、年金制度との整合性がとれないばかりか、非正規社員と正規社員間の処遇格差が著しく、低賃金雇用によって大企業の下請け的な雇用制度になっており、社会不安を助長していると言わざるを得ません。
このような意見を述べると労働者への解雇が頻発し、雇用の安定につながらないといった意見が必ずでてきますが、結論からすると、雇用が不安定になるからこそ成長性が高い企業ほど雇用を安定させるために従業員を長期的に維持（雇用）し、賃金等を含めた合理的な事業運営がなされてくるのではないでしょうか。
もっとも、成長できない企業では、適正な解雇はおこなわれると思われますが、労働移動が可能な社会では真剣に仕事をしてきた人材ほど幅広く職業選択の自由を確保することができるようになるでしょう。
大事なことは、いずれにしても『非正規（有期雇用）』を前提とした労働法制を確立して、身分制度的な雇用形態を廃止し、国民に共通する公平な機会を与えて、いろいろな挑戦が何度でもできる社会ということになるのでしょうか。

【参考になるブログ】
「自立した自由な個人」により成り立つスウェーデンの高福祉
橘玲 DIAMOND Online 2016.07.07

英EU離脱とトランプ躍進で危惧される「エリートの弱体化」
岸 博幸 DIAMOND Online 2016.07.08

今後の経済成長を考えるとき、少なくとも株主価値だけを目指していくと、この点では将来的な成長や拡大のマイナス要因となり、株主資本主義という形態も滅びることになるのかもわかりません。
安定的な成長（当然+-の成長の変化を織り込みながら）を目指すためには、雇用を拡大していくことが求められるはずです。
勿論、次の課題は、雇用の質になると思われますが、歴史的な立ち位置にある現代からすると、それでもなお雇用の拡大に挑戦していく以外に経済成長の道が拓かれることはないのではないでしょうか。

それは株価や為替レートの世界のような秒単位のプロセスを作りだす能力ではなく、世代を超えていくという人間が持つ物語と将来を眺望できるという身体感覚が重要な要素となるように感じられます。

所詮、本質がない金融（単なる金集め、金ころがし）では、いずれ経済成長の限界が露呈してくることは間違いないところでしょう。
すでに金融資本主義の限界は、少しづつ露呈してきているのかもわかりません。

現代とは、なんのための経済かと、素朴に考えてみることが必要な時代なのかもわかりません。

本との触れ合いは、いわゆる読書と仕事の割合は実践（仕事）7割に対して書籍3割くらいでしょうか。
あくまで実践（身体感覚）が主であり、書籍は従です。
また、いろいろな考え方の書籍を読みますが、理由は、自分の身体感覚を研ぎ澄ますためなのかもわかりません。
頭で納得するよりは、身体感覚として考え方が自然になじむ書籍もあれば、なかなかなじまいものもありますが、自分のイメージが膨らんでくる書籍も数多くあります。
さらに購入したけれども、なかなか前に進まない（むずかしくて読めない）ものもありますが、そのような書籍はしばらくつんどく状態でしょうか。
しかし、あるときから読めるようになったりするから不思議です。
仕事は、現場、現実、現物といわれますが、もっとも重要な要素は『人』です。
『人』が主体となる経営（仕事）は、大変な工程（かなり複雑な変数）なるのではないでしょ

うか。
また、仕事や人生の面白さや楽しさも、すべては『人』からしかはじまるものでしょう。
だからこそ、現場で人と仕事をすることが主体となり、複雑な人間を理解するために本を読むのかもわかりません。

『今回のテーマで読み比べてみた書籍の一部』

世界経済の大潮流
水野和夫（著）

日本経済はなぜ浮上しないのか
片岡剛士 （著）

老楽国家論
浜矩子（著）

経済は「競争」では繁栄しない
ポール・Ｊ・ザック（著）